『愚問和歌集』の成立（上）
―恋部の視点から―

三村晃功

一　はじめに

筆者は近時、古典和歌を例歌（証歌）として収載する、近世期に成立した類題和歌集の研究を進めているが、この期に成立した類題集の種類たるや種々様々で、まさに多彩な様相を呈しているといっても過言ではなかろう。そのような多彩を極める近世類題集について、筆者はこれまで数多の類題集を俎上に載せて基礎的な考察に専心してきたが、それらの類題集は形式的にみて、部立別に、歌題・集付（出典注記）・例歌（証歌）・詠歌作者を一セットの形で緊密に構成・編纂された、いわゆる純正な形式の類題集である場合がほとんどであった。

ところが、このたび筆者が逢着した類題集は、部立別には、雑部を欠く、春部・夏部・秋部・冬部（上冊）、恋部（下冊）の五つの部立から構成されたうえに、その内容も、作者注記を欠き、歌題と例歌（証歌）に歌数を注記するのみという、純正な類題集とはやや趣を異にする種類の類題集であるのだ。その類題集とは国立歴史民俗博物

館に蔵される高松宮旧蔵の『愚問和歌集』が該当するわけだが、本集は目下、同館以外には存在が認められない稀覯本と認定される貴重な書目であるようだ。ちなみに、本集は『和歌大辞典』（昭和六一・三、明治書院）に、小池一行氏の簡にして要を得た紹介が存するので、参考までに次に引用しておこう。

愚問和歌集（ぐもんわかしふ）『室町～江戸期類題集』編者・成立年次未詳。『高松宮御所蔵旧有栖川宮御本マイクロフィルム目録』（昭和44宮内庁所陵部）に江戸期写本一部が知られる。上冊は巻頭に欠脱があり四季題一四三題に五四〇〇首、下冊は恋一六八題に二九九六首を収める。下冊題は「愚問和歌集」と記す。有名な古歌もみえ、詠歌の手引として書き集められたものか。各題の下に収集歌数を示す。（小池一行）

この小池氏の記述によって、本集の概略についてはほぼ明らかになったであろうが、しかし、本集の内容については諸種の点で、具体的な検討の余地が少なからず残されているように愚考される。したがって、本稿では、例によっての蕪雑な作業報告にすぎないが、これまで辞典類以外にはほとんど言及されることのなかった『愚問和歌集』について、成立の問題を中心に据えて基礎的な問題究明を試みた。大方の厳しいご批正を賜らば、幸甚に思う。

二　書誌的概要

さて、『愚問和歌集』の伝本については、すでに言及したように、現下、他に類本を見出しえない状況にあることが、『私撰集伝本書目』（昭和五〇・一一、明治書院）の、

119　愚問和歌集

愚問和歌集　　二　江戸中写　　高松宮（三・八五・八六）

の記事によって確認されるので、以下には該本に依拠して論述していきたいと思う。

なお、底本については、国文学研究資料館によって提供されたマイクロ・フィルムを活用したことを付記しておきたい。

まず、本集の書誌的概要に言及すれば、おおよそ次のとおり。

国文学研究資料館蔵のマイクロ・フィルム番号　21―82―12（228）
所蔵者　国立歴史民俗博物館（高松宮旧蔵）　蔵
編　者　未詳
体　裁　大本（縦二四・〇センチ、横一七・〇センチ）　二冊　袋綴じ仮装
外　題　愚問和哥集　恋（下冊）（上冊は表紙を欠く）
内　題　愚問和歌集（下冊）（上冊は巻頭部分を欠く）
各半葉　二十行（一部八～九行　和歌一首一行書き）
総丁数　二百二十五丁（上冊・百四十一丁、下冊・八十四丁）
歌題数　三百七題（〈上冊〉春部・三十七題、夏部・三十一題、秋部・三十八題、冬部・三十三題、〈下冊〉恋部・百六十八題）
総歌数　七千八百八十首（〈上冊〉春部・千五百二十四首、夏部・千九十四首、秋部・千百三十首、冬部・千百四十九首、〈下冊〉恋部・二千九百八十三首）
序　なし
跋　なし
識語　なし
奥書　なし

この書誌的概要によって、本集は、雑部を除く、四季部と恋部とから部立構成されたうえ、春部・三十七題、夏部・三十一題、秋部・三十八題、冬部・三十三題、恋部・百六十八題の都合三百七題の歌題に、春部・千五百二十四首、夏部・千九十四首、秋部・千百三十首、冬部・千百四十九首、恋部・二千九百八十三首の、都合七千八百八十首の例歌（証歌）を付した、かなり大規模の類題集であると知られよう。

ちなみに、上冊の巻末には、

春　題卅八　歌千五百卅
夏　同卅三　同千百七拾
秋　同卅八　同千五百卅
冬　同卅三　同千百七拾
合　題百四拾　歌五千四百首

のごとく、四季部に限って各歌題数と例歌（証歌）の注記が施されている。ただし、この本集の編者が明記している数値は、筆者が整理した数値と異同するが、この点については逐次後述することにしたい。

なお、本集の歌題については、単独題を掲げるのを原則しているが、なかには結題も付記される場合も指摘されるので、次に参考までに、本集の誌面構成の実態を掲げておこうと思う。

まず、次の事例は春部の「春駒」の場合だが、これが本集の原則的な誌面構成である。

春駒　　五（首）

1　春の野の駒の気色のことなるは沢べの草や若葉さすらん　（一二四七）
2　取つなぐ人しなければ春駒の野べの沢水影もとゞめず　（一二四八）
3　をのれとやはなれもやらぬ若草に人はつながぬ野べの春駒　（一二四九）

4　あづさゆみ春の沢べのはなれ駒やがてあれのみまさるころ哉　（一二五〇）
5　冬枯になつかし駒も春くればいばゆ計に成にける哉　（一二五一）

これに対して、次の事例は秋部の「霧」の場合だが、中に結題が注記されている。

霧　卅（首）

6　朝霧のふもとをこめて立ぬれば空にぞ秋の山は見えける　（三二八〇）
7　しの丶めのよこぐもながら立こめて明もはなれぬ峯の朝霧　（三二八一）
（十五首省略）
8　行路霧　旅人のむまやづたひにこゑはして行衛へだつる秋の朝霧　（三二九七）
（三首省略）
9　河霧　明ぬとてゆるす関路のかひもなし行さきとづる霧のふかさに　（三三〇一）
（五首省略）
10　海霧　見ずもあらず見もせぬ霧のたえまより行衛さだめぬ浦の舟人　（三三〇七）
（二首後略）

以上、本集の誌面構成の基本的な実態を示す二つの事例を提示してみた。

三　歌題の問題

さて、本集の内容についての概略は、おおよそ以上のとおりだが、それでは、本集はいかなる歌題を収載しているであろうか。この問題に示唆を与えるのが、すでに紹介済みの、本集が上冊巻末に注記する「春　題卅八　夏

同卅三　秋同卅八　冬同卅三」の歌題数値の記事である。この数値は実際に筆者が整理した現物のそれと半ば異同する。すなわち、秋部と冬部の歌題数は両者ともに、三十八題と三十三題と共通するが、春部と夏部のそれは、本集の注記に比して、実際には前者が一題減の三十七題、後者が二題減の三十一題と異同するのだ。この異同は、春部では巻頭部分に欠落が認められる事情と、夏部では、「郭公」題の例歌が「三百六十首」と明記されるのに実際は、三百二十首しか収載されていない問題と関係するのかも知れないが、明確なのは「慮橘」題（四十八首と明記するが、実際は三十三首）の箇所に一丁分の脱落がある事情に起因しているようだ。

本集の歌題の問題は以上のごとく把握して、以下に本集の収載する具体的な歌題について、収載数も付記して掲げるならば〈括弧内は実数〉、次のとおりである。

〔春部〕　三十八題〈三十七題〉

（立春）　十四首・歳内立春　二十首・初春　三十首・子日　二十首・霞（霞7・朝霞14・夕霞2・暁霞4・野霞3・山霞16・浦霞24）　七十首・鶯（鶯11・早春鶯12・朝鶯20・夕鶯3・暁鶯3・雪中鶯22・竹鶯7・聞鶯2・野鶯2・谷鶯5・山家鶯13）　百首・若菜（若菜25・雪中若菜21・田若菜2・沢若菜12）　二十五首・余寒（余寒22・二月余寒3）　二十五首・残雪　十五首・春雪　三十五首・梅（梅26・雪中梅8・梅遠薫12・梅薫風40・依風知梅10・月前梅8・夜梅15・紅梅7・行路梅5・古郷梅3・山家梅4・水辺梅6・落梅6）　百五十首・柳（柳25・柳露8・雨中柳3・行路柳13・岸柳4・池辺柳4・河辺柳・18）　六十首〈七十五首〉・早蕨　十首・春曙　十二首・春夜　五首・春月　四十首・春雨　三十六首・桃　二首・春水　六首・遊糸　九首・野遊　十首・桜（桜36・待桜5・尋花15・初花8・盛花19・見花13・遠見花9・依花待人5・山花留人6・花下月暮6・行路花5・羇旅花4・折花10・挿花3・惜花10・朝花5・夕花5・夜花5・暁花5・花間鶯2・松間花5・雲間

花13・雨中花3・月前花3・禁中花3・社頭花3・古寺花2・故郷花8・閑居花6・山家花6・山花28・谷花2・滝花2・池花8・湖上花2・海辺花2・落花52・月前落花4・雨中落花4・庭落花15・山路落花6・水辺落花8・暮春花6・閏三月花2）　三百六十首・帰鴈（帰鴈60・雲中帰鴈18・夕帰鴈4・夜帰鴈3・暁帰鴈8・遠帰鴈7）百首・雉　十首・雲雀　十首・喚子鳥　十二首・春駒　五首・蛙　十五首・苗代　十五首・菫菜　十首・杜若　十首・躑躅　六首・款冬（款冬23・籬款冬20・水辺款冬17）　六十首・藤（藤9・雨中藤5・松上藤25・池藤15・河藤2・浦藤2・暮春藤7）　六十五首・遅日　十二首・暮春　五十五首・三月尽（三月尽23・閏三月尽2）　二十五首

〔夏部〕　三十三題〈三十一題〉

首夏　二十首・更衣　三十五首・残花　十五首・新樹　八首・卯花（卯花13・夕卯花6・夜卯花5・卯花如月4・行路卯花2・□卯花20）　五十首・葵　十五首・郭公（郭公55・尋郭公10・待郭公87・時鳥一声26・初聞時鳥2・遙聞時鳥7・朝時鳥2・夕時鳥5・夜時鳥8・暁時鳥10・寝覚時鳥12・夢中時鳥5・月前時鳥12・雨中時鳥15・霞間時鳥8・禁中時鳥1・橘時鳥2・関時鳥2・古郷時鳥1・里時鳥9・山家時鳥7・山時鳥7・河時鳥1・海時鳥1・五月時鳥20・閏五月時鳥4・六月時鳥1）　三百六十首〈三百二十首〉・慮橘　四十八首〈三十三首〉・早苗（早苗29・山田早苗19・海辺早苗2）　五十首・五月雨（五月雨18・五月雨久5・五月雨雲5・五月雨晴4・古郷五月雨3・山家五月雨2・山五月雨2・谷五月雨10・橋五月雨4・池五月雨1・江五月雨3・河五月雨7・海辺五月雨6）　七十首・水鶏　十二首・鵜河　二十八首・照射　十首・蚊遣火　十首・蛍（蛍30・水辺蛍9・江蛍2・沼蛍6・沢蛍8・池蛍3・河蛍5・海辺蛍2）　六十五首・蟬　十五首・截虫　五首・夏草（夏草25・水辺夏草5）　三十首・瞿麦　十三首・夕顔　八首・蓮　十三首・夕立（夕立23・遠夕立13・山夕立11・海辺夕立3）　五十首・夏朝　三首・夏夜　十三首・夏月（夏月40・禁庭夏月・雨後夏月3・樹陰夏月6・水辺夏

月9）六十首・夏風　五首・扇　八首・氷室　十首・泉　二十首・納涼（納涼17・杜納涼2・松下納涼8・野径納涼3・水辺納涼20）五十首・六月祓　五十首

〔秋部〕　三十八題

立秋　二十首・初秋　五十首・七夕（七夕15・待七夕10・七夕月8・七夕雲6・七夕風3・七夕露9・七夕霧4・七夕草8・七夕鳥8・七夕糸5・七夕橋20・七夕舟12・七夕河14・七夕別9・七夕後朝9・七夕庚申1・閏月七夕1）百六十首・残暑　五首・秋風　十四首〈十五首〉・野分　五首・露　三十五首・秋夕　六十首・草花二十八首・荻　四十五首〈四十首〉・萩　五十首・女郎花　二十五首・蘭　十二首・苅萱　八首・薄　二十首・槿　十首・葛　二首・鴈（鴈15・初鴈21・夕鴈5・深夜鴈3・暁鴈3・月前鴈2・霧間鴈11）六十首・鶉七首・鳴　三首・虫（虫60・尋虫3・暁虫8・庭虫2・野虫5・暮秋虫9）六十首・鹿（鹿8・遠聞鹿5・夕鹿6・庭鹿24・暁鹿8・月下鹿4・月前鹿4・旅泊鹿2・野鹿8・七夕鹿5・山鹿6）八十首・駒迎　八首・月（月194・夕月夜7・八月十五夜7・九月十三〈夜〉1・不知夜月2・立待月2・居待月2・廿日月2・在明月13・松間月12・竹間月3・禁中月3・古寺月3・古郷月3・山家月10・田家月6・野径月14・山月40・関月7・橋月4・池月5・江月5・水辺月3・河月9・湖上月10・海辺月20・暮秋3）三百首・霧（霧17・行路霧4・河霧6・海霧3）三十首・秋霜　三首・秋雨　三首・秋水　二首・秋山　二首・秋夜　二首・秋田　二十八首・稲妻　八首・擣衣（擣衣15・夜擣衣10・深夜擣衣3・連夜擣衣5・暁聞擣衣14・擣衣驚夢5・月前擣衣24・風前擣衣7・里擣衣12・旅宿擣衣2・田家擣衣1・山家擣衣1・河辺擣衣1・海辺擣衣4）百首・菊（菊13・菊露8・菊霜7・菊似霜4・籬菊6・菊映菊4・月照菊13・山路菊4・水辺菊9・暮秋菊11・閏九月菊1）八十首・紅葉（紅葉33・尋紅葉3・行路紅葉4・月照紅葉3・霧籠紅葉3・関路紅葉5・松間紅葉11・山紅葉42・添紅葉3・河紅葉14・暮秋紅葉9）百三十首・蔦　五首・暮秋　三十首・九月尽（九月尽39・閏九月尽1）

四十首

〔冬部〕　三十三題

初冬　四十首・時雨（時雨25・朝時雨3・夕時雨3・夜時雨2・暁時雨11・時雨雲8・杜時雨3・岡時雨3・関時雨3・旅宿時雨3・里時雨3・山家時雨4・山時雨25・河辺時雨2・海辺時雨2）　百首・落葉（落葉30・落葉如雨5・落葉交雨2・雨後落葉3・庭落葉11・杜落葉11・松間落葉5・古郷落葉2・山家落葉6・山落葉27・河落葉24・湖上落葉2）　百二十首・残菊　十首・寒草　二十五首・寒蘆　十五首・枯野　八首・霜（霜21・橋上霜2・篠霜4・野径霜3・冬山霜5）　三十五首・氷（氷14・滝氷9・池氷9・河氷31・湖上氷1）　六十首・冬朝　三首・冬夕　二首・冬夜　二首・冬風　二首・冬雲　二首・冬月（冬月49・冬暁月8・雨後冬月3・池冬月8・湖上冬月1・海辺冬月1）　七十首・千鳥（千鳥11・夕千鳥8・夜千鳥9・暁千鳥8・旅泊千鳥3・嶋千鳥2・浦千鳥20・潟千鳥9）　七十首・水鳥　五十五首・網代　八首・鷹狩　三十首・神楽三十首・五節　十五首・霰（霰27・暁霰5・野霰6・山家霰7・山霰5）　五十首・霙　八首・雪（雪31・初雪20・朝雪8・夕雪4・夜雪5・暁雪3・松雪16・竹雪4・禁中雪5・社頭雪3・庭雪13・山家雪18・山雪66・野雪9・旅行雪5・関雪5・橋雪2・池辺雪3・河辺雪5・海辺雪25）　二百五十首・椎芝　五首・薪　五首・衾　五首・埋火　二十首・炭竈　二十八首・仏名　八首・歳内梅　九首・歳暮　六十首・除夜　二十首〈十九首〉

〔恋部〕　百六十八題

初恋　五十首・忍恋　百首・忍久恋　二十首・遅忍恋　二首・月前忍恋　十五首・寄月忍恋　二首・不云出恋　八首・云出恋　六首・顕恋　十八首・名立恋　二十二首・聞恋　十首・見恋　十八首・未見恋　十六首〈十五首〉・尋恋　十五首・久恋　二十首・祈恋　二十三首・祈不逢恋　五首・祈逢恋　六首・不逢恋　百首・待恋　六十首・忍待恋　五首・深夜待恋　三首・連夜待恋　八首〈七首〉・月前待恋　二十七首・違約恋　七首・

来不留恋　八首・来無実恋　六首・逢恋　六十五首〈六十四首〉・忍逢恋　六首・稀逢恋　二十五首・逢不逢恋　百首・契恋　三十首・月前契恋　十五首・契不逢恋　十五首・別恋　三十八首〈三十七首〉・月前別恋　十五首〈十四首〉・暁別恋　二十五首・後朝恋　四十首・増恋　十首・月増恋　七首・雨増恋　三首・思恋　十六首・片思恋　三首・相思恋　二首・馴恋　三首・憑恋　七首・疑恋　八首・変恋　十首・切恋　三首・厭恋　八首・偽恋　六首・忘恋　四十首・絶恋　四十三首〈四十首〉・絶久恋　五首・絶後逢恋　五首・互恨恋　八首・月前恨恋　六首・寄月恨恋　四首・遠恋　十五首〈十四首〉・近恋　七首・旧恋　八首・隔恋　五首・旅恋　二十五首・称他人恋　二首・恋暮故人　二首・老恋　八首・幼恋　八首・命恋　十八首・寄心恋　十八首・寄面影恋　八首・寄涙恋　十八首・寄夢恋　七十二首・寄源氏物語恋　三首・寄遊女恋　五首・寄傀儡恋　五首・寄商人（恋）　三首・寄樵夫恋　三首・寄海人恋　二十首〈十八首〉・寄枕恋　五十首・寄衣恋　四十二首・寄布恋　三首・寄紐恋　十三首・寄帯恋　十五首・寄席恋　十八首・寄鏡恋　三十三首・寄髪恋　六首・寄本結恋　二首・寄匣恋　三首・寄弓恋　三十二首・寄箭恋　二首・寄琴恋　七首・寄笛恋　七首・寄扇恋　二首・寄絵恋　寄書恋　二十六首・寄硯恋　三首・寄祓麻恋　五首・寄木綿恋　二首・寄玉恋　十五首・寄糸恋　十五首・寄縄恋　十二首・寄網恋　十二首・寄笠恋　二首・寄車恋　五首・寄船恋　三十五首・寄筏恋　三首・寄石恋　四首〈三首〉・寄鐘恋　十首・寄木恋　五十八首・寄花恋　九首・寄紅葉恋　七首・寄草恋　百十首・寄篠恋　十首・寄竹恋　三首・寄鳥恋　五十八首・寄虫恋　五十五首・寄貝恋　十二首・寄獣恋　二十五首・朝恋　五首・昼恋　五首・夕恋　十五首・夜恋　十首・暁恋　五首・寄日恋　二首・恋月　十首・月前恋　四十首・寄月恋　五十首・寄七夕恋　十八首・寄空恋　六首・寄雲恋　五十三首・寄風恋　四十二首・寄雨恋　三十首・寄霞恋　三首・寄霧恋　二首・寄露恋　二十八首・寄霜恋　四首・寄氷恋　三首・寄霰恋　二首〈一首〉・寄雪恋　五首・寄火恋　十五首・寄烟恋　九十首・寄屋恋　二首・寄柱恋　二首・寄窓恋　二首〈一首〉・

寄簾恋　二首・寄戸恋　三首・寄垣恋　五首〈四首〉・寄橋恋　三十首・寄関恋　二十八首〈二十七首〉・寄市恋　五首・寄里恋　二首・寄山恋　二十五首・寄谷恋　五首・寄田恋　七首・寄野恋　三首・寄原恋　六首・寄水恋　三十首・寄泉恋　八首・寄懸樋恋　四首・寄池恋　六首・寄河恋　六十首・寄滝恋　二十首・寄嶋恋　五首・寄江恋　五首・寄湊恋　十八首・寄海恋　三十首

以上、本集に収録する歌題を部立別に列挙してみたが、これを歌題の視点から概観すると、四季部と恋部の間には大きな異同が指摘されるようだ。まず、四季部では、最初の組題百首で部類百首でもあり、組織・形態面からも後の百首歌への影響が多大であった『堀河百首』との影響関係が著しいように推察される。たとえば、本集と『堀河百首』の歌題を比較してみると、『堀河百首』の歌題のうち、夏部で「菖蒲」の題を、本集が収載していない以外は、春部・秋部・冬部のいずれの部も、本集は『堀河百首』の歌題をすべて収載しているのだ。

何故に夏部が「菖蒲」の題のみを収載していないのか、その理由は分明でないが、『堀河百首』と重複しない、本集のそのほかの歌題について、『明題部類抄』（平成二・一〇、新典社）に所収される定数歌が収載するそれと比較すると、おおよそ次の二十五の定数歌集と一致をみる。

すなわち、成立年時のほぼ明らかな作品では、A『和漢朗詠集』（一〇一八年頃）・B『永久百首』（一〇一六年）・C『後京極摂政（良経）家百首』（一一八七年）・D『後京極摂政（良経）家二夜百首』（一一九〇年）・E『六百番歌合』（一一九三年）・F「順徳院御撰歌合十五首」（一二〇二年）・G「庚申歌合五首」（一二〇五年）・H『道家百首』（一二一五年）・I『道助法親王五十首』（一二一九年）・J「道助法親王家十首」（一二二〇年）・K『為家卿千首』（一二二三年）・L『洞院摂政（実雄）家百首』（一二三二年）・M『従二位家隆百首』（一二三五年頃）・N『宝治百首』（一二四八年）・O『現存和歌六帖』（一二四九年）・P『顕朝卿野宮亭千首』（一二五五年）・Q『弘長百首』（一二六一年）・R「亀山殿十首」（一二六一年）・S「禅林寺殿御会百首」（一二六一～六三年）・T『白河殿七百首』（一二六五年）・

U『中務卿（宗尊）親王家歌会』（一二七一年）・V「西園寺三首」（一二七二年）が該当し、成立年時の分明でない作品では、W『後京極摂政（良経）家百首』（一一六九～一二〇六年）・X『実雄百首』（一二一七～七三年）・Y『為家一夜百首』（一一九八～一二七五年）・Z『三百六十首和歌』（光俊出題〈一二〇三～七六年〉）・a『九条内大臣（基家）家百首』（一二〇三～八〇年）・b『源恵千首』（正応五〈一二九二〉年、天台座主）・c「二字百首」（成立年未詳）・d「一字百首」（同）が該当する。そこで、本集が収載する歌題について、『堀河百首』と重複しないそれを、整理、一覧すると、次の（表1）のごとくなる。

（表1）本集四季部の歌題出典別一覧表

歌題／出典	春・歳内立春	初春	余寒	春雪	春曙	春夜	春月	桃	春水	遊糸	野遊	雉	雲雀	蛙	計
A						○									
B			○		○							○		○	
C															
D															
E			○		○						○	○	○	○	
F															
G						○									
H				○											
I		○													
J															
K											○				
L															
M															
N	○		○	○			○								
O							○	○				○		○	
P					○		○								
Q		○		○			○								
R															
S				○			○								
T					○				○						
U	○				○		○								
V															
W															
X	○						○								
Y															
Z			○	○	○	○	○			○			○		
a															
b			○				○					○	○	○	
c			○		○		○								
d					○		○	○				○	○		
計	3	2	6	5	8	3	11	2	1	1	2	5	4	4	

秋夕	野分	秋風	残暑	秋・初秋	納涼	扇	夏風	夏月	夏夜	夏朝	夕立	夕顔	瞿麦	夏草	截虫	蝉	鶏河	水鶏	新樹	残花	夏・首夏	暮春	遅日	躑躅
									○							○					○	○		○
		○			○	○					○		○	○		○	○	○						○
					○	○																		
○	○		○			○			○		○	○		○		○	○		○				○	
		○														○								
										○														
				○										○							○			
				○										○										
	○								○								○		○	○	○			
				○																				
					○								○				○					○		
○											○			○								○		
		○		○			○	○			○		○		○	○								○
○		○			○			○			○	○	○	○		○	○	○	○					
				○	○			○			○													
											○													
○											○										○			
					○						○			○										
○								○																
○			○		○			○			○	○		○				○						
								○														○		
○	○				○			○	○		○	○	○	○		○	○	○	○		○	○		○
○					○			○	○		○		○	○			○				○	○		
						○										○		○						○
8	3	4	2	5	9	4	1	8	5	1	12	4	6	10	1	8	7	5	4	1	6	6	1	5

霙	五節	冬月	冬雲	冬風	冬夜	冬夕	冬朝	枯野	寒草	残菊	冬・落葉	暮秋	蔦	稲妻	秋田	秋夜	秋山	秋水	秋雨	秋霜	鳴	鶉	葛	草花
					○						○	○				○								
○	○										○		○	○		○	○							
																								○
				○																				
○							○	○		○	○	○	○	○	○				○	○	○	○		
															○			○		○				
						○																		
												○												
															○				○	○				
																			○					
		○							○		○				○									
		○												○	○						○	○	○	
○	○	○							○	○	○				○									
		○									○	○												
		○								○														
		○						○												○				
											○				○									
																								○
		○																						
		○												○	○	○								
												○												
		○							○		○	○			○	○			○		○	○	○	
								○	○		○	○		○										
○													○								○	○		
4	2	9	0	1	1	1	1	3	4	3	9	7	3	5	9	4	1	1	4	4	4	4	2	2

合計	歳暮	歳内梅	仏名	衾	薪	椎柴
12	○		○			
25			○	○	○	○
1						
3						
34			○	○		○
5						
3						
5						
3						
3						
9			○			
1						
5	○					
12						
21			○	○		
22			○			
11	○					
2						
7	○					
2						
9			○			
1	○					
1						
5						
3						
19						
4	○					
32			○			
20	○		○			
14				○		
294	7	0	9	4	1	2

この（表1）をみると、本集の歌題は『堀河百首』以外の定数歌では、『六百番歌合』『源恵千首』『永久百首』『顕朝卿野宮千首』『現存和歌六帖』「二字百首」『為家一夜百首』などに収載される歌題が比較的多数を占めている実態が窺知されるようだが、一方、『堀河百首』以外の定数歌に多く見られる歌題では、「夕立」「春月」「夏草」「納涼」「秋田」「落葉」「冬月」「仏名」「春曙」「蝉」「夏月」「秋夕」「鵜河」「暮秋」「歳暮」などが指摘され、本集の収載する歌題は、比較的オーソドックスな歌題であると言えるようだ。

なお、冬部の「冬雲」と「歳内梅」の二題は『明題部類抄』所収の定数歌には見出しえないが、「冬雲」題は、次の『玉葉集』（八六四）の実兼の

11　夕日さす峯の時雨の一むらにみぎりを過る雲の影哉　（四一七一）

の11の詠に、「歳内梅」題は、『風雅集』（七八一）の徽安門院の

12　こほるかと空さへ見えて月のあたりむら〳〵しろき雲もさむけし　（四一七二）

の12の詠に、各々、みえているので、この両題は京極派好みの歌題といえようか。

それでは、本集の恋部に見られる歌題についてはいかがであろうか。この点について、四季部の場合と同様にまず、

『堀河百首』との比較を試みると、本集は「初遇」と「片恋」の二題を収載していないけれども、恋部も歌題蒐集面で『堀河百首』が係っているものとみなして、『堀河百首』の歌題を除いて、本集が『明題部類抄』所収の定数歌と重複する歌題について調査してみた。ちなみに、四季部の場合に掲げた定数歌と重複しない出典作品は省略する一方、恋部の歌題と重複する出典作品については、言うまでもなく新たに掲げて次の（表2）を作成した。それらの典拠作品は、1『後鳥羽院五十首』（一二〇一年）、2「影供歌合三首」（同）、3「影供歌合中院三首」（同）、4「道家家歌合十首」（一二三二年）、5「住吉社行家卿十首」（一二六七年）、6『為家卿百首』（一二七二年）、7『三百三十首』（一二七四年）、8「文永十二年勧進三首」（一二七五年）、9『二条院百首』（一一四三～六五年）、10『四字定家卿百首』（一一六二～一二四一年）、11「前内大臣九条三十首」（不明）、12「中院五首」（同）、13「月百五十首」（同）、14「公宴三首」（同）のとおりだが、これらの出典を（表2）では時系列に従って組み入れたので、さきの出典作品の略号と混在して不体裁を生じさせている点については、ご海容賜りたいと思う。

（表2）本集恋部の歌題出典別一覧表

歌題／出典	初恋	忍恋	忍久恋	遅久恋	月前忍恋	寄月忍恋	不云出恋	云出恋	顕恋	名立恋
B	○	○								
C		○								
D										
E	○	○							○	
1										
2	○									
F										
3		○								
G										
H										
I										
K										
L		○								
4										
M		○								
N										
O										
P	○	○							○	
Q	○	○								
R			○							
S	○									
T										
5			○							
U										
6										
7	○	○							○	
8										
9		○								
W	○	○								
10										
X		○								
Y										
a										
11										
b	○	○							○	
12		○								
13						○				
14										
c		○							○	
計	10	15	2	0	0	1	0	0	5	0

月増恋	増恋	後朝恋	暁別恋	月前別恋	別恋	契不逢恋	月前契恋	契恋	逢不逢恋	稀逢恋	忍逢恋	逢恋	来無実恋	来不留恋	違約恋	月前待恋	連夜待恋	深夜待恋	忍待恋	待恋	不逢恋	誓恋	祈逢恋	祈不逢恋	祈恋	久恋	尋恋	未見恋	見恋	聞恋
		○			○																									
		○																												
								○				○								○					○				○	○
																										○				
		○																												
		○			○			○													○				○	○				○
		○																												
		○						○				○								○	○				○	○	○		○	○
		○																			○									
										○									○											
								○				○								○					○		○		○	○
																								○						
		○																		○						○			○	
	○																													
	○							○				○								○	○	○			○	○	○		○	○
											○																			
					○			○				○								○					○	○	○		○	○
0	2	8	0	0	3	0	0	6	0	1	1	5	0	0	0	0	0	0	1	6	4	1	0	1	6	6	4	0	6	6

寄面影恋	寄心恋	命恋	幼恋	老恋	恋暮故人	称他人恋	旅恋	隔恋	旧恋	近恋	遠恋	寄月恨恋	月前恨恋	互恨恋	恨恋	絶後逢恋	絶久恋	絶恋	忘恋	偽恋	厭恋	切恋	変恋	疑恋	憑恋	馴恋	相思恋	片思恋	思恋	雨増恋
			○	○			○		○	○	○				○			○												
															○			○												
												○			○			○												
											○	○			○			○				○	○							
																											○			
								○	○	○	○				○			○	○	○	○		○		○	○				
																			○											
			○	○			○		○	○	○				○			○												
	○																													
															○			○												
							○			○	○				○			○	○		○		○						
															○			○												
									○						○			○												
0	1	0	2	2	0	0	3	1	4	5	5	1	0	0	10	0	0	10	3	1	2	1	3	0	1	1	1	0	0	0

寄縄恋	寄糸恋	寄玉恋	寄木綿恋	寄祓麻恋	寄硯恋	寄書恋	寄絵恋	寄扇恋	寄笛恋	寄琴恋	寄箭恋	寄弓恋	寄匣恋	寄本結恋	寄髪恋	寄鐘恋	寄席恋	寄帯恋	寄紐恋	寄布恋	寄衣恋	寄枕恋	寄海人恋	寄樵夫恋	寄商人恋	寄傀儡恋	寄遊女恋	寄源氏物語恋	寄夢恋	寄涙恋
												○	○																	
							○		○	○							○				○		○	○	○	○	○			
										○		○																		
												○																		
																						○								
○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○		○		○	○		○	○								
	○	○																○			○	○								
		○																			○	○								
	○	○					○	○	○	○		○				○		○	○	○	○	○								
	○	○														○					○									
○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○				○		○	○	○	○	○								
		○																			○	○								
							○		○	○		○					○				○		○	○	○	○	○			
																○					○									○
							○		○	○												○								
2	5	7	2	2	2	1	5	3	6	7	2	7	2	1	0	6	2	4	3	2	10	8	2	2	2	2	2	0	0	1

寄雨恋	寄風恋	寄雲恋	寄空恋	寄七夕恋	寄月恋	月前恋	恋月	寄日恋	暁恋	夜恋	夕恋	昼恋	寄朝恋	寄獣恋	寄貝恋	寄虫恋	寄鳥恋	寄竹恋	寄篠恋	寄草恋	寄紅葉恋	寄花恋	寄木恋	寄鐘恋	寄石恋	寄筏恋	寄船恋	寄車恋	寄笠恋	寄網恋
		○																○												
○	○	○			○				○	○	○	○		○																
○		○												○			○			○			○							
○	○																													
○																														
																				○										
														○		○	○			○			○							
		○															○													
○	○	○			○			○					○		○									○	○	○	○	○	○	○
																								○						○
○	○	○			○									○		○	○			○			○							
○	○	○			○			○										○		○			○	○			○			
○	○	○			○			○							○			○	○		○			○		○	○	○	○	○
		○																												
○	○	○			○													○		○				○						
					○																									
○								○	○	○	○	○				○	○			○			○							
																							○							
																											○			
○	○	○			○																									
									○	○	○																			
																				○										
																						○								
									○	○	○	○												○		○	○	○		
12	9	12	0	0	9	0	0	5	4	4	4	3	1	4	2	3	5	4	1	9	1	1	7	6	2	3	6	3	2	3

寄嶋恋	寄滝恋	寄河恋	寄池恋	寄懸樋恋	寄泉恋	寄水恋	寄原恋	寄野恋	寄田恋	寄谷恋	寄山恋	寄里恋	寄市恋	寄関恋	寄橋恋	寄垣恋	寄戸恋	寄簾恋	寄窓恋	寄柱恋	寄屋恋	寄烟恋	寄火恋	寄雪恋	寄霰恋	寄氷恋	寄霜恋	寄露恋	寄霧恋	寄霞恋
		○									○																			
		○									○			○	○							○								
						○																								
																						○						○		
○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	○
	○						○							○	○							○								
○		○	○			○	○	○	○	○	○	○	○			○	○		○		○	○		○				○	○	○
		○	○			○					○					○	○				○							○		
○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○	○
																						○								
								○			○			○								○								
		○									○			○	○							○								
														○	○															
											○			○	○							○								
						○					○																			
3	3	7	4	1	0	5	4	4	3	3	10	3	2	8	7	4	4	2	3	2	4	10	0	3	2	0	2	5	3	3

合計	寄江恋	寄湊恋	寄海恋
4			
4			
4			
42	○		
8			
4			
2			
2			
2			
6			
5			
62	○	○	○
5			
7			
14			
20		○	
1			
70	○		○
5			
3			
23	○		
63	○	○	○
3			
14			
1			
45	○		
1			
1			
2			
1			
12			
9	○		
2			
3			
25			
5			
1			
1			
27			
509	7	3	3

この（表2）から、本集の恋部の歌題を概観すると、『明題部類抄』に収録される、『堀河百首』以外の定数歌に頻出するのは「初恋」「忍恋」「絶恋」「恨恋」「寄衣恋」「寄草恋」「寄月恋」「寄雲恋」「寄風恋」「寄雨恋」「寄烟恋」「寄山恋」などの歌題である一方、そこにまったく見出しえない歌題が「互久恋」「月前忍恋」「不云出恋」「云出恋」「名立恋」「未見恋」「祈逢恋」「深夜待恋」「連夜待恋」「月前待恋」「違約恋」「来不留恋」「来無実恋」「逢不逢恋」「月前契恋」「契不逢恋」「月前別恋」「暁別恋」「月増恋」「雨増恋」「思恋」「片思恋」「疑恋」「絶久恋」「絶後逢恋」「互恨恋」「月前恨恋」「称他人恋」「恋慕故人」「命恋」「寄面影恋」「寄夢恋」「寄源氏物語恋」「寄髪恋」「恋月」「月前恋」「寄七夕恋」「寄空恋」「寄氷恋」「寄火恋」「寄泉恋」の多数に達しているのは驚きである。

ここに本集の恋部の歌題面における属性を指摘しえようが、翻って、いかなる作品（定数歌）に本集の恋部の歌題が多く収載されているかを、時系列でみると、『六百番歌合』（一一九三年）、『為家卿千首』（一二二三年）、『宝治百首』（一二四八年）、『顕朝卿千首』（一二五五年）、「禅林寺殿御会百首」（一二六一～六三年）、『白河殿七百首』（一二六五年）、『三百三十三首和歌』（一二〇三～七六年）、『源恵千首』（一二九二年）、「二字百首」（成立年未詳）などである。

ところで、本集の恋部の歌題は四季部のそれと比べて、『明題部類抄』の収録作品（定数歌）に掲載されない歌題が多いように推察されるので、それらの歌題の典拠はいったい何であるのかを検討してみたいと思う。

まず、「互久恋」題の例歌（証歌）を調査してみると、次の

13　恋しなん後の世までの思ひ出は忍ぶ心のかよふ計ぞ　（一七一）

の13詠が『新拾遺集』恋一に平忠度の作（九四五）として同題で載るので、この歌題の典拠は『新拾遺集』であろうと認められるであろう。なお、恋部からの引用和歌に付した番号は、四季部の番号には連続せず、恋部独自の番号である。

次に、「月前忍恋」題の例歌をみると、次の

14　もらすなよ露のよすがの袖の月草葉の外にやどる月かげ　（一七四）

の14の詠が『新千載集』恋一に浄弁の作（一一三九）として同題で掲載されているので、この場合は『新千載集』が「月前忍恋」題の典拠になろう。

次に、「不云出恋」題の例歌を検討すると、次の

15　いはじたゞしらばさすがにと思ひなすなぐさめにこそかゝるたのみを　（一九四）

の15の詠が『玉葉集』恋二に永福門院の作（一三六六）として「不言出恋」の措辞で載るので、この場合の歌題の典拠は『玉葉集』であろうと推察される。

次に、「云出恋」題については、次の

16　かくとだに岩間にむせぶ谷水のもらさばかよふ心とも哉　（二〇〇）

の16の詠が『新拾遺集』恋一に聖尊法親王の作（九三三）として「欲云出恋」の題下に載るので、あるいは本集の歌題はこの題の援用か、書写ミスの可能性を想定し得るかも知れない。となると、この場合は『新拾遺集』が当題の典拠となろう。

次に、「名立恋」題の例歌を検すると、次の

17　なき名のみ立田の山にたつ雲の行衛もしらぬながめをぞする　（二四一）

の17の詠が『新古今集』恋二に藤原俊忠の作（一一三三）として同題で掲載されているので、この場合の歌題の典拠は『新古今集』であろうと認定されよう。

次に、「未見恋」題の例歌を検討すると、次の

18　山のはをわけ出る月のはつかにも見てこそ人は人をこふなれ　（二七八）

の18の詠が『新勅撰集』恋一に後堀河院の作（六八四）として同題で収載されているので、この歌題の典拠は『新勅撰集』であろうと認められよう。

次に、「深夜待恋」題の例歌を調査すると、次の

19　たのめてもむなしくふくる程みへてよそなる月の影さへぞうき　（五二七）

の19の詠が『続拾遺集』恋三に中御門経任（九〇〇）の作として同題で載るので、この場合、『続拾遺集』が当題の典拠となるであろう。

次に、「違約恋」題の例歌では、次の

20　我を君待夜もあらばいひてましたのめてこぬはさぞやつらきと　（五六四）

の20の詠が『続古今集』恋一に藤原公実の作（一一三〇）として同題で見出しえるので、この場合、当題の典拠は『続古今集』と認定されよう。

次に、「来不留恋」題の例歌では、次の

21　恋々てかひもなぎさのおきつなみよせてはやがて立かへれとや　（五七一）

の21の詠が『千載集』恋二に藤原顕仲の作（七一一）として同題で載るので、この場合の歌題の典拠は『千載集』となるであろう。

次に、「来無実恋」題の例歌では、次の

22　かづきするあまのむすべるたくなわのくるとはすれどとけぬ君哉　（五八四）

の22の詠が『続後撰集』恋三に源頼政の作（九一七）として同題で載るので、この場合、当題の典拠は『続後撰集』となるであろう。

次に、「逢不逢恋」題の例歌では、次の

23　思ひきや相みしよはのうれしさに後のつらさのまさるべしとは　（六八〇）

の23の詠が『金葉集』（三度本）恋下に藤原実能の作（四四〇）として同題で収載されるので、この場合、当題の典拠は『金葉集』（三度本）となるであろう。

次に、「月前契恋」題の例歌では、次の

24　月をだにみしよのかげと思ひ出よちぎりの末はあはず成とも　（八一七）

の24の詠が『続千載集』恋四に九条隆博の作（一五〇四）として同題のもとに載るので、この場合、当題の典拠は『続千載集』になるであろう。

次に、「契不逢恋」題の例歌では、次の

25　こぬ人をさらにうらみばちぎりしをたのみけりとや思ひなされん　（八二八）

の25の詠が『玉葉集』恋二に前参議能清の作（一三八六）として同題で載るので、この場合、当題の典拠は『玉葉集』と認定されよう。

次に、「月前別恋」題の例歌では、次の

26　わするなよ又あふまでとちぎるともしらぬかたみの有明の月　（八八九）

の26の詠が『新後拾遺集』恋三に二条為氏の作（一一三七）として同題で載るので、この場合、当題の典拠は『新後拾遺集』となろう。

次に、「暁別恋」題の例歌では、次の

27　鳥の音におどかされてしたはずは思ひもあへぬわかれならまし　（八九四）

の27の詠が『続後拾遺集』恋三に二条為藤の作（八三三）として同題のもとに掲載されているので、この場合、当題の典拠は『続後拾遺集』となろう。

次に、「月増恋」題の例歌では、次の

28　いとゞしくおもかげにたつこよひ哉月をみよとはちぎらざりしを　（九七三）

の28の詠が『金葉集』（二度本）恋下に花園左大臣有仁の作（四二四）として同題で載るので、当題の典拠は『金葉集』（二度本）ということになろう。

次に、「雨増恋」題の例歌では、次の

29　たのめしを待夜の雨の明がたにおやむしもこそつらくきこゆれ　（九七九）

の29の詠が『玉葉集』に小侍従の作（一四一四）として「依雨増恋」で掲載されるので、この場合、当題は『玉葉集』に依拠しているのではなかろうか。

次に、「絶久恋」題の例歌では、次の

30　人しれずむすびそめてしわか草の花のさかりも過やしむらん　（一一二七）

の30の詠が『千載集』恋四に藤原隆信の作（八八八）として同題で掲載をみるので、当題の典拠には『千載集』が想定されるであろう。

次に、「絶後逢恋」と「互恨恋」の両題の例歌では、前者が次の

31　二度や物を思はおちかへりかゝるなさけの又かはりなば　（一一三六）

の31の詠が『玉葉集』恋五に新院少納言の作（一七九五）として、後者が

32　うらむるも我ならひにぞたのまるゝ恋敷事の有かと思へば　（一二三〇）

の32の詠が同集同巻に惟宗広言の作（一八〇〇）として各々、同題のもとに収載されるので、この場合、両題の典拠には、『玉葉集』が想定されるであろう。

次に、「月前恨恋」題の例歌では、次の

33　住月の涙にくもる影までも思へば人のつらさ成けり　（一二三七）

の33の詠が『新拾遺集』恋五に滋野井実前の作（一三五一）として同題で載るので、当題の典拠には『新拾遺集』が想定されるであろう。

次に、「称他人恋」題の例歌では、次の

34　忍びかね今は我とやなのらまし思ひすつべきけしきならねば　（一三〇六）

の34の詠が『千載集』恋三に藤原良通の作（八二五）として同題で収められるので、当題の典拠は『千載集』と認めうるであろう。

次に、「恋暮故人」題の例歌では、次の

35　なき人を思ひ出たる夕暮はうらみし事ぞくやしかりける　（一三〇八）

の35の詠が同じく『千載集』の恋五に、覚性法親王の作（九五四）として「暮恋故人」題下に収載されているので、この場合、当題は『千載集』の当該歌題を、本集の編者が書写する際に犯した誤謬と推察されるので、『千載集』が当題の依拠作品と推断されようか。

同様に、「命恋」題の例歌を検討すると、次の

36　ありとてもあふよもしらぬ命をば何のたのみになをおしむらん　（一三三六）

の36の詠が『玉葉集』恋五に、二条教良女の作（一七五四）として「恋命」題のもとに収められるので、この場合は、

本集の編者が賢しらによって本来の「恋命」題を、「命恋」題に改題したものと推察されるので、当題の典拠を『玉葉集』と想定することは許されようか。

次に、「寄面影恋」題の例歌では、次の

37　人のみするおもかげならばいか計我身にそふもうれしからまし　（一三六八）

の37の詠が『玉葉集』恋五に伏見院の作（一八二一）として同題で載るので、当題の典拠は『玉葉集』となろう。

次に、「寄夢恋」題の例歌では、次の

38　思ひつゝぬる夜も人のつらき哉ゆめもうつゝのみゆる成けり　（一三九二）

の38の詠が『続古今集』恋三に亀山院の作（一一九〇）として同題で収められるので、当題の典拠は『続古今集』が想定されよう。

次に、「寄源氏物語恋」題の例歌では、次の

39　あふさかのなをわすれにし中なれどせきやられぬは涙成けり　（一四六二）

の39の詠が『千載集』恋四に読人不知歌として同題のもとに載るので、当題の典拠は『千載集』となろう。

次に、「寄髪恋」題の例歌では、次の

40　玉かづらいかにねし夜のたまくらにつらきちぎりの影はなれけん　（一六七一）

の40の詠が『新拾遺集』恋五に、藤原為家の作（一三七三）として「寄鬘恋」題下に収められるので、この場合、本来「髪」と「鬘」とは同じ意味ではないが、本集の編者は「髪」を「鬘」と同じ意味に解して、当題を設定したものと推察されるので、当題の典拠を『新拾遺集』と見なして支障はないであろう。

次に、「恋月」題の例歌では、次の

41　我恋はむらくもの空に行月の相見がたくも成まさる哉　（二一七六）

の41の詠が『新千載集』恋一に光巌院の作（一一五〇）として同題で載るので、当題の典拠は『新千載集』となるであろう。

次に、「月前恋」と「寄七夕恋」の両題の例歌のうち、まず前者では、次の

42　詠むれば恋しき人のこひしきにくもらばくもれ秋の夜の月　（二一二八六）

の42の藤原基光の詠（三六九）が、後者では、次の

43　七夕は又こん秋もたのむらんあふ夜もしらぬ身をいかにせん　（二三七六）

の43の後三条公教母の詠（三六三）がともに、『金葉集』（二度本）の恋上に同題（後者は「寄織女恋」の表記だが）で掲げられているので、この両題の典拠は『金葉集』（二度本）と認められよう。

次に、「寄火恋」題の例歌では、次の

44　さぞとだにほのめかさばやなには人おりたくこやのあしのしのび火　（二五七九）

の44の詠が『続千載集』恋一に二条為氏の作（一〇四〇）としてみえるので、当題の典拠は『続千載集』が想定されるであろう。

最後に、「寄泉恋」題の例歌では、次の

45　我恋はおぼろのしみづ岩こえてせきやるかたもなき心哉　（二八二九）

の45の詠が『新千載集』恋二に源俊頼の作（一二二六）として同題で収載されるので、当題の典拠は『新千載集』と認定されるであろう。

以上、本集の恋部の歌題のうち、『明題部類抄』が収載する作品（定数歌）に未収載の歌題について種々検討を加えた結果、そのほとんどは勅撰集に収載の歌題である実態を明らかにし得たが、次の「祈逢恋」「連夜待恋」「月前待恋」「片思恋」「疑恋」「寄空恋」（「寄天恋」はある）「寄氷恋」などの七歌題については、目下、本集が収録す

る例歌（証歌）を検討した限りでは、原拠資料に同一の歌題を見出しえなかった。そこで、これらの七歌題が類題集の代表格である『題林愚抄』と『明題和歌全集』に収録をみるか否かを調べてみると、次の「連夜待恋」「月前待恋」「疑恋」の三題は確認されるなか、本集の「祈逢恋」「片思恋」「寄空恋」題の例歌が各々、両類題集には「祈遇恋」「片思」「寄天恋」題のもとには収載されているので、本集の編者が両類題集を参看した可能性はなしとしないであろう。

ちなみに、「祈逢恋」と「片思恋」の両題が後水尾院撰『類題和歌集』に同題で掲載されるほか、「寄空恋」題も霊元院撰『新類題和歌集』に収録をみるのだが、「寄氷恋」題のみは本集の編者が新たに案出・考案した独自の歌題であるのかも知れない。

それはともかく、ここで本集の恋部の歌題の典拠について総括しておくならば、その大半の歌題は『明題部類抄』収録の作品（定数歌）に見出しうるなか、それらの作品に未収録の歌題は、本集に収載の例歌（証歌）の検討から『金葉集』（二度本・三度本）『千載集』『新古今集』『新勅撰集』『続後撰集』『続古今集』『続拾遺集』『玉葉集』『続千載集』『続後拾遺集』『新千載集』『新拾遺集』『新後拾遺集』などの院政期から南北朝期にかけて成立した勅撰集に見出し得、これらの勅撰集が依拠作品と推察されよう。しかし、それでもなお、典拠を見出しえない七歌題のうち、「祈逢（遇）恋」「連夜待恋」「月前待恋」「片思（恋）」「疑恋」「寄空（天）恋」の六歌題は『題林愚抄』『明題和歌全集』に収録されるが、「寄氷恋」の歌題のみは目下、当題を掲げる類題集を探索しえない現況にあるので、もしかしたら、本集の編者が新たに案出・考案した独自の歌題であるかも知れない、と推測されようか。

（付記） 本稿の後半部分の「『愚問和歌集』の成立（下）―恋部の視点から―」は、『光華日本文学』第十七号（平成二一・一〇）に掲載した。枚数の制約で、やむなくこのような処置を講じた不首尾を、ご海容賜りたく思う。